川松 あかり（東京大学大学院・総合文化研究科 超域文化科学専攻）

「炭鉱町の日常―嗜好品文化の場と記憶―」

1. 研究の背景と概要

日本では、2000年代以降「産業遺産」や「近代化産業遺産」として過去の産業を再評価し、地域のシンボルとして活用しようという動きが高まっている[1]。このような中で、炭鉱をめぐる人々の「記憶」や生活史の語りを記録し、その意味を考察しようとする実践や研究も行われている[2]

これらの研究は、いずれも三井・住友など1つの大手炭鉱を対象として行われている。本研究が対象とする鞍手町（35.60㎢、約16,000人 [3]）には、三菱新入炭鉱三坑（第六坑・第七坑・鞍手坑）と旧西川村の小ヤマの密集地（永谷・新延・八尋・室木）が存在し、1971年まで炭鉱が存在した。鞍手町の小ヤマや廃坑部落を生きる人々の生きざまについては、鞍手町に移住し炭鉱労働者たちを描き続けた記録文学作家上野英信などによって記録されているが、大炭鉱と小ヤマ、農家や商家の住民が日常の場をいかに共有し、また分断されていたのかを具体的に検討したものはない。発表者は2016年4月から鞍手町を生活拠点として筑豊で文化人類学・民俗学の観点からフィールドワークを行っている。本研究においては調査中偶然収集された語りも含め、町民40名のライフ・ストーリーを、最後の炭鉱の好況期であった1950年代を中心とした嗜好品・娯楽の場、楽しみという観点から整理した。本発表では、この中で最も多様な人々に言及された映画上映の場を中心に据え、そこから見えてくる炭鉱町に生きた人々の日常とその記憶のありようを考察する。

図1　鞍手町内の地域名と劇場・会館の分布
（鞍手町1985『昭和60年版　鞍手町要覧』p. 3、「地区別人口分布状況地図」をもとに発表者作成）

2. 映画館をめぐる記憶とその語り

2-1　「素人芝居」から「映画」へ：娯楽の場で催されたもの

―鞍手町内の中心地は、三菱新入炭鉱第六坑の近くの中山商店街である。ここには三菱新入炭鉱の厚生施設「協和会館」と、商店街内の回り舞台を有した劇場「朝日座」があった。

―中山商店街に育ったM氏（1926生・女）は、戦中に青年団で朝日座の舞台に立ったことがある。協和会館でも戦後素人芝居が流行し、1950年頃には働きながら専属の歌手・演奏者・司会をする者がいた。

―三菱の映写技師として1952年に就職したI氏（1934生・男）は、2年かけて鞍手町内でだれも持っていなかったという1級映写技師の免許を取得した。「娯楽の殿堂協和会館」の最も目立つところにいたからか、「Iのてっちゃんっていったら知らんもんはおらん」と言った人もいるという。

---

[1] 木村至誠2018「炭鉱遺産：なぜ人をこんなにも引き付けるのか」『炭鉱と日本の奇跡：石炭の多面性を掘り直す』中澤秀雄・島﨑尚子編著、青弓社。

[2] 例えば、大阪産業労働資料館、関西・炭鉱と記憶の会2017『炭鉱の記憶と関西　三池炭鉱閉山20年展』関西大学経済・政治研究所、坂田勝彦2017「炭鉱の閉山に伴う広域移動経験者のライフヒストリー：生活と自己の再構築に注目して」『日本オーラルヒストリー研究』（13）pp.111-127、永吉守他2010『移動する家族の生活史：旧産炭地を事例として』京都大学グローバルCOE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」。

[3] 鞍手町HP「鞍手町再発見（概要）」http://www.town.kurate.lg.jp/syoukai/gaiyou/index.html（2019/05/07閲覧）、「鞍手町の人口・世帯数（平成30年度）」http://www.town.kurate.lg.jp/syoukai/gaiyou/jinkou_h30.html（2019/05/07閲覧）。

2-2　映画館へ行くという経験

―協和会館では2,3日毎にフィルムが変わり、三菱炭鉱の労働者や中山地区の住民には「映画やら芝居は変わるたんびに見に行った」（H氏、1932生・女／A氏、1935生・女）という人も多い。

―一方、小ヤマ地域（八尋・永谷）や長谷の住民は、中山に行くには5～6人で連れ立って、山越えをしていかなければならなかったと語り、たまにしか行くことはなかったという。

―八尋の小ヤマに暮らしたK氏（1930生・女）は、映画を見に行く時には「男がタオル一本かけたら」「よそ行き」の格好だったという。彼女は協和会館に行ったとき「奥さんたちエプロンかけて買い物やら行きよった」と語る。一方、三菱新入炭鉱六坑に夫が勤めていたA氏（1935生・女）は洋裁をしており、いつもおしゃれに気を使っていたと話す。K氏は協和会館を「楽しみ」としては語らない。

2-3　小ヤマの「楽しみ」・「息抜き」

―K氏は若い頃「楽しいことはなかった」というが、「もうやれやれと思う時は」青年団で小屋を建てたり小学校を借りたりして素人踊りなどを披露したり、盆踊りをしたりした時だったと語った。

―室木の小ヤマの坑内夫だったE氏は、我ながら「あの坑夫達は何を考えて仕事しよったんか」と悩みながら、坑内での昼休みに元ドサ回りの役者だった坑夫をはやし立てて、坑内に舞台を作って「大利根河原」を踊らせた思い出を、「後にも先にも一番楽しみやった」と語った。E氏は1週間に1度隣の宮田町まで映画を見に行く他ほとんど室木から出たことはなかったという。

―K氏は今の盆踊りの状況を聞くと、今の子どもは「テレビでも見よったほうがいいっちゅうぐらいでもう出てこんとやろ」と言い捨てた。

3. 考察：時代の産業・技術・娯楽メディアと高度経済成長に置いていかれた炭鉱町

◆<u>時代の産業城下町の、時代の娯楽メディアの場：</u>戦後、復興のエネルギー産業として優遇された炭鉱は、1950年初頭、朝鮮戦争期の特需で最後の好景気を迎えた。一方「娯楽の殿堂協和会館」はこの頃、中山の住民が日々歩いて行ける映画の場として賑わった。日本の全国映画館入場員数は1958年に最高の11億2745万人を記録、全国映画館数が最大になるのは1960年の7457館である。映画の繁栄も1960年頃を頂点として、人々が日常的に楽しむ視聴覚メディアは1953年に放送が開始されたテレビへと移り変わっていくことがわかる。炭鉱も、そして炭鉱町の記憶と共に思い出される映画も、当時の時代の産業／娯楽メディアであると同時に、すでに次の時代へと移りつつあった。1級映写技師として名をはせたI氏は、1960年頃になるとこれからはテレビの時代になると考え、夜学に通っている。それでも、当時の技術と娯楽の思い出は、中山の住民たちにとって誇らしく、活き活きしたものである。

◆<u>置いていかれた人々の生活と労働の現場での楽しみ・息抜き：</u>小ヤマのK氏に楽しみを与えたのは、中山のM氏が戦中に新しい娯楽として人々を楽しませた素人芝居であった。E氏の「大利根河原」の話は、「会館」や「劇場」を映画に奪われた1人のドサ回りの役者坑夫が、小ヤマの坑夫として吸収されたことも教えてくれる。経済学者の正田誠一は、大手炭鉱が生み出す「老輩労働力」を中小炭鉱が吸収することで低賃金労働が温存される問題を指摘しているが[4]、これと同様、前代の娯楽メディアもまた、彼らと共に小ヤマに吸収されている。小ヤマの人々は中山に映画を見に行ったことがないわけではないにもかかわらず、身近な仲間との、生活と労働の現場での、自分の体を直接使って行う踊りや芝居という前代の娯楽にこそ、楽しみを見出し、記憶して、語った。K氏やその妹が語る「テレビ」は、炭鉱のあったころはよかったと語られる近所付き合いの衰退の象徴でもある。

[4] 正田誠一1987『九州石炭産業史論』九州大学出版会、pp.269-272。